

本を選ぶ

NO.445 2022年(令和4年)6月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>アシナガバチとマルハナバチ

●選書の法則:S.R. ランガナタンからの187のメッセージ(20)

●帰ってきた図書館員(64)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

アシナガバチとマルハナバチ

甲斐信枝の『あしなが蜂と暮らした夏』は、京都郊外の農家に巣を作ったアシナガバチの7カ月間の観察記録である。朝早くから日が落ちるまで毎日のように農家に通い、時には新幹線に乗せて——列車内で逃げられ大騒ぎになったりしながら、東京のアパートまで連れて行った。詳細な観察記録でありながら、アシナガバチとともに暮らした日々を綴った心地よいエッセイでもある。

アシナガバチと暮らす日々は洛北のキャベツ畑で始まった。キャベツの玉の中にいる青虫を捕まえ器用に丸めて団子にすると、アシナガバチはそれを胸にかかえて飛びたって行く。どこへ行くのだろう。巣を探して歩き回りやっとみつけたのは、納屋にたくさんのハチの巣がある「利右衛門」という屋号の農家だった。姑の「りえもんのおかあ」も嫁さんも、ハチの観察をさせてほしいという申し出を快く受け入れてくれた。あとがきによれば40年余り前の夏のできごとだという。『あしながばち』(「かがくのとも」1975年)が生まれた背景に、こんなおもしろい物語があったとは。

さて、私がよく見かけるのはマルハナバチである。数年前からひんぱんに庭に来るようになった。他の種類のハチやチョウなども来ているはずなのに、マ

ルハナバチがことさら意識されるのは羽音があまりに大きいからだ。ハナバチ類は攻撃的なハチではないというが、あの大きな図体とあの大きな音。近くで飛び回られていたら、気になって庭仕事などしてられるものではない。たいていは私の方が作業を中断して退散するのである。

マルハナバチは庭のルリマツリがお目当てらしく、いつもその周辺を飛んでいる。夏の終わり頃、何気なく振り返って驚いた。ルリマツリの葉の上で、大きなカマキリがマルハナバチのお尻にかじりついている。カマキリの行動はひどくゆっくりで、ハチの体を半分くわえたまま音もたてずじっとしていた。しばらく見ていたものの事態は進展しないので、結末を見ずにその場を離れたが、あのマルハナバチがカマキリから逃れられたとは到底考えられない。それでも不思議と残酷という気持ちにはならず、ひたすら「すごいもの見ちゃった」という感慨だけが残った。

そのマルハナバチだが、トマトの受粉に利用されていると聞いた覚えがある。調べてみるとトマトやイチゴなどの温室栽培に利用されていた。ミツバチの利用例もあるが、ミツバチは花蜜のある花にしか寄って行かないのに比べ、マルハナバチはトマトのように“蜜の無い花粉だけの花”にも寄って行く。着果率も高いという。『まるはなばちのレオン』は、たくさんためこんだ花粉をミツバチに分けてあげているが、知ってみればなるほど、それぞれの特性を踏まえた話だったのである。

(並木せつ子)

選書の法則： S. R. ランガナタンからの187のメッセージ (20)

吉植 庄栄

20. 第四法則と選書・上

『図書館選書論第2版』の内容を、ランガナタンがよく使った架空の対談方式で紹介している。今回から第四法則について。時間を節約しないで3回の予定。

【登場人物】

○ランガナタン：図書館界のビッグスター、S. R. ランガナタン (1892-1972) 先生。今年は生誕130周年・没後50周年。イベント企画してくれる方、超大大募集!!! 全国どこでもお話しに行きます! (筆者がですね。)

○第四法則くん：ランガナタンの著作『図書館学の五法則』に出てくる「読者の時間を節約せよ (Save the time of the reader)」という4番目の法則。原作に倣ってしゃべります!

○宵越しの金は持たねえんだぜ

ランガナタン (以下「ラ」)：今回から第四法則くんの回だ。よろしく頼む。

第四法則くん (以下「四」)：師匠、おはようございます!!

ラ：(えー落語家? 短気な江戸っ子?) 90年経った今、第四法則くんは大人気だ。何せ現代は時間に追われる毎日、最近の若者はネット動画を3倍速で視聴して時間を節約するらしいな。

四：そんなのあたぼうっすよ。「ゆっくり」動画見てたもんじゃ、日が暮れちまう。

ラ：(若いね汗) ふーん、そんな感覚なんだね。筆者さんが冬の集中講義でこの連載を読ませた受講生から「ランガナタン先生、時空を超えて青葉山(この大学がある山)まで来てくれてフツ軽だと思った。」と。「フツ軽」って「フットワーク軽い」の略なんだってね。

四：何でも省略す。師匠は話が長いんで朝になっちゃう。昔から「あたりまえだあ、べらぼうめ」が長いから「あたぼうだ!」って古今亭志ん生師匠 (1890-1973) も言っていますぜ。

ラ：(うーん、古い? 新しい? 謎!) 気を取り直して、毎回取り上げるアメリカの新解釈で、なんと君はセンター (新・第一法則) に抜擢されているよね! (この新解釈とは、OCLCが『図書館学の五法則』の順番を現代の観点で並べなおし再解釈したもの。時間に追わ

れている現代は、第四法則が新・第一法則にふさわしいとのこと。興味を持った方は、是非、吉植庄栄。“E1611 - 時代は変わり順序も変わる：『図書館学の五法則』再解釈の試み”。カレントアウェアネス-E. 2014, no. 267. <http://current.ndl.go.jp/e1611>, (参照 2022-05-25). を読んで欲しい。)

四：第一法則兄貴には悪いんだけど、ありがてえなあ。やっとなあ時代の時代が来たって寸法でさあ。

ラ：そこでだ、売れっ子の第四法則くんに基づく選書とは??

四：ともかく出版直後の本をぱぱぱっと選んで、すーと配架すりゃあ良いんです。

ラ：刊行された本が、待たせずに利用者に至ることが大事だな。それを更に詳しく考えていこう。

四：分かりやした!

○意図が隠れてんだぜ

ラ：まずは第一法則くんと第三法則くんまでと君は何が違う?

四：そいつは「図書」が出ないってことすよねえ。

ラ：そうだ、第一法則くんから第三法則くんまで「利用者」と「図書」との関係についてだった。しかし君はいきなり「時間」の話が出てくるし「図書」は出てこない。

四：たしかに! するってえと、あっしは兄さん達と全く違うんですかい?

ラ：そうとも言えるし、そうとも言えない。

四：じれってえなあ、師匠! ずばっと頼むぜ!

ラ：第一法則くんは、「利用する」としか書いていないが、「利用者」を暗に示していたんだな。「図書は利用者が読んでなんぼ」ということだ。

四：へー、するってえとあっしにもそんな含みが?

ラ：そう。「時間」は「図書」を暗に示している。

四：どういうことですか? つまり「時間」がかかるかどうかってえのは、全て「図書」次第ってえことすかね。

ラ：お見事! 座布団1枚!

四：つまり読みたい「図書」がどんくらい時間かけないと手許に至らないのか？てーのは、やっぱり兄貴たちと同じように「利用者」と「図書」の関係の話だったってえこと？

ラ：その通りだ。言葉は変えても結局「利用者」と「図書」の関係の法則なんだ、君ら五法則は。

四：えー！ そいつは知らなかった！ 合点です、師匠！

○図書館員の時間も節約しよう！

ラ：それでだ、時間は「客観的な時間」と「主観的な時間」の2つがある。客観的とは皆が共有している時間尺度だ。つまり時計が示す時間。

四：それで社会は動いてやすよね。公共機関なんかはこれが全て。

ラ：しかしな、人間にはそれぞれの時間感覚があるだろう。例えば好きなことに没頭していると、時間が経つのは早いよね。1時間が1分くらいに感じる。逆に、1分間が1時間くらいに感じられることもある。で、図書館に関する時間も利用者それぞれで感じ方が違う。

四：分かりやした。おれっちみたいに短気な奴と逆に呑気な奴がたしかに居ますよね。しかし短気な利用者の兄貴・姐さん達に「遅いなあ」とか「なんか時間かかるなあ」って思われるのは最悪っす。

ラ：うむ、そう言われぬように何を注意してる？

四：うーん、とにかく3倍の速さで移動することっすかね。

ラ：そりゃあ違う（笑）。一番はレファレンスで利用者さん達を読みたい図書に時間をかけず繋げることだよ。

四：なるほど！図書館員が無駄なく読みたい図書に誘導してあげねーとっすね。

ラ：うむ、そこでだ、他の仕事はできるだけ省力化してレファレンス対応する時間を創出するのが大事だよ。

四：そうそう、そこなんすよ。でも偉い連中は省力化すると、コストカットと人員削減しか考えねーんだよなあ。あー！ 世知がれーな全く、ちきしょうめ。

ラ：ということで「利用者の時間節約」は実は「図

書館員の時間節約」という裏の意味もあるんだ。覚えておいてくれ。

○で選書は？

四：今回はあまり選書の話が出てこないっすねえ。

ラ：選書の前段階を今まで話していたんだ。本格的には次回からだが、ともかく図書を選んで書棚に並ぶまでをできるだけ時間をかけないことだ。

四：出版後できるだけ早く図書館の本棚に並べるべきっすよねえ。

ラ：その通りだ。ここで大事なのが年間の選書スケジュールだ。

四：第三法則兄貴のくんだりでもあったけど、年度末の慌てた選書は「予算を年度末までに使い切る」のが大目標。そいつはいけねーや。なので1年に1回まとめて選書ってえのは、良くねえってことですかい？

ラ：その通り。予算消化も良くないが、1年に1回きりって、出版してから書棚に並ぶまで最高で1年かかるということだよ。

四：なるほど、読みたい利用者を1年待たせるってえことすね。

ラ：そうだ。「1分を1時間」と感じて待ってる利用者、そのスケジュールでは酷だよな。その結果図書館を期待しなくなる。

四：いけねー！出版からどのくらいかかるか、って基準で急がねえと！

ラ：そうそう。1年や半年単位で選書している図書館は、サイクルをもっと早めよう。1か月単位で新刊情報をチェックして、どんどん選ぶべきだ。

四：なるほど。するってえと、選書作業自体も無駄を省いですぐやんねえと、新刊本も古くなっちゃいますよねえ！

ラ：うむ。選書と時間について、次回以降本格的に考えよう。次は3か月後ね。

四：えー！来月ではないんですかい？腐っちゃいますよ。3か月＝3年な気分だ、なげーなあ。

ラ：すまんのう。ゆっくり動画を見て待っててくれ。次は暑くなった頃に皆さん、会いましょう！

（よしうえ しょうえい：盛岡大学文学部・図書館副館長）

帰ってきた図書館員 (64)

—図書館と猫—

山下 青葉

もう十年以上前のことになるが、猫好きの職場の先輩と共に貴志川線（和歌山県）の貴志駅に猫の駅長「たま」を見に行っていたことがあった。

当時はたま駅長の勤務日が土日限定だったのを平日に行っていたためか、駅長は母猫・妹猫と猫舎（ガラス張りの博物館の展示ケースのような仕様だったと記憶している）にて就寝中で、やはりたま駅長目当てでやって来た他の旅行者と共に「せっかく来たんだから起きんかい！」とガラス越しに威嚇したのだった。

その時先輩と「図書館にも猫館長がいたらいいのにね」と話していて、その後出版された『図書館ねこデューイ』（ヴィッキー・マイロン著 羽田詩津子訳 早川書房 2008）を読んで図書館でも猫が飼えるのだ！と感激したものの、でもこれは外国の話で、日本のましてや公共図書館では動物など飼えるわけがないとずっと思ったまま今日まで来た。

ところが先日、毎度おなじみの愛読している「カレントアウェアネス」（国立国会図書館のポータルサイト）で「ネコ館長ムクニャン就任5周年を迎えて」（2021年11月11日付）の記事を発見し、驚いてじっくり読み込んでしまった。

ネコ館長ムクニャンが在籍しているのは長野県南部に位置する喬木村の椋鳩十記念館・記念図書館で、名称からわかる通り喬木村は児童文学者の椋鳩十の出身地で、顕彰と読書活動推進のため、1992年に開館した。

その図書館にムクニャンが迷い込んできたのは2016年の1月で、その日が水たまりも凍るようなかなり冷え込む天気で、しかも前脚にケガをしていることもわかったため、館長判断で図書館で保護することになった。

広報等で飼い主を探したが見つからず、そのうち椋鳩十も同じトラ柄の猫を飼っていたこと、職員が図書館のキャラクターとして描いていたイラストのネコ「ムクニャン」に似ていたということもあり、迷い猫は自然と「ムクニャン」と呼ばれるようになり、館長に推挙する声も出て、ついに

同年4月正式に館長を拝命する運びとなった（ムクニャンが図書館に迷い込んできた1月22日は奇しくも椋鳩十の誕生日だそうだ）。

現在ムクニャンは週2日の出勤で、出勤日は朝の外のパトロールから始まり、書棚のある図書館のスペース以外の館内外で季節や気温に合わせて好きな場所で過ごし、静かな時間はまったりと休憩を取っているとのこと。図書館に迷い込んできた時は推定で1歳くらいというから、現在は6歳か7歳くらい、人間でいうと40～45歳くらいといったところ、もっと活動的でもいいかと思われるが、成猫の平均的な睡眠時間は14時間というからこんな感じなのだろう。

勤務日は来館者に囲まれることも多く、また取材を受けることも多いようだが、マイペースで対応していて、その完璧な仕事ぶりに職員は感服しているようだ

カレントアウェアネスの記事には写真がなく、本文中にFacebookでその姿を発信していきたいとの記述があったので、早速自宅のパソコンでアップされている動画を見てみた。いい感じのトラ柄の猫で、猫好きは誰でもそうであろうが動きを一日中見ていると飽きない。場所が図書館なら猫好きの図書館員はなおさらであろう。撮影をする方は大変かと思うが（雪の中で撮影されている動画があった）猫好きだったらまんざらでもないのではと思う。

何ともうらやましい話だが、児童文学者、しかも『大造じいさんとガン』や『マヤの一生』など動物文学の第一人者（加えてかつて鹿児島県立図書館館長であった）の椋鳩十の生誕地の図書館ということがこの猫館長の誕生に大きく寄与していると思われ、私の勤務している何の特徴もない一介の公共図書館では残念ながら真似のできない話と思われた。

もう一か所関連記事で取り上げられていたのが岩手県奥州市胆沢図書館の事例で、こちらの図書館では2017年に猫が出てくる本だけを集めた常設

コーナー「猫ノ図書館」を開設し、コーナーの顔として市内からの公募による来館者投票で猫館長「むぎ」を任命し、主に画像によるPRやSNSでの発信を行っているとのことである。

画像等での活動が中心なのはやはり来館者の猫アレルギー問題や猫自身にストレスを与えてしまうかもしれないという動物保護の観点からの判断とのことだが、それでも全く図書館に現れないわけではなく、行事参加や飼い主の図書館来館に同行するというかたちで来ることはあるようだ。

改めてネットで検索してみたところ、こちらはブリティッシュ・ショートヘアの貫禄のあるオス猫でなかなかの美猫であった。

こちらの図書館も今年コーナー開設5周年とのことで、コロナウイルス感染症対策で休館していたため開設日の2月22日（猫の日）には間に合わなかったものの、3月からの開館後に様々なイベントが行われているようである。

ここ数年、猫ブームとやらで、猫グッズが飛躍的に増え、図書館関係でも『図書館司書30人が選んだ猫の本棚』（高野一枝著／郵研社／2021）が出版され、雑誌「MOE」の2022年3月号では猫の絵本の特集が組まれたりしている。

当分はこれらを使って猫関連の蔵書等を増やしつつ、迷い猫の到来を待つとするか。

（やました あおば）